岩手医科大学歯学部口腔外科における外来診療の実態について

——特に昭和44年1月より昭和45年6月に至る1年6カ月の臨床統計的観察——

小川邦明・藤岡幸雄・大橋 靖・関山三郎・工藤啓吾

本間隆義・玉木功一・青村修明

Clinico-statistical observation of the outpatient

Department of oral surgery, School of Dentistry, Iwate Medical University
during the period between January 1969 and June 1970

Kuniaki OGAWA・Yukio FUJIOKA・Yasushi OHASHI・Saburo SEKIYAMA・Keigo KUDO
Takayoshi HONMA・Kouichi TAMAKI・Nobuaki AOMURA

緒 言

岩手医科大学歯学部付属病院口腔外科は昭和40年4月に開設され、丁度満5年を経過したことになる。当科は東北地方における、最初の歯槽機関の口腔外科専門診療施設として発足したわけであって、この5年間における療診療の動態を調査することは、当地方における口腔外科的診療対象の実態を知るうえで、きわめて有用なものと考えられる。以上の観点に立って、創立より5年間にわたる当科における診療の実態を整理、分析したのであるが、このうち入院患者の動態については、すでに第24回日本口腔科学会総会において報告した¹⁾。

今回は外来患者について同様の集計を行ない、特に昭和44年1月より昭和45年6月に至る1年6カ月間について、新来患者の診断別、月別頻度について調査し、さらに地域別受診状態などの臨床統計的検討を行なったので、その概要を報告したい。

調 査 成 績

I. 口腔外科外来患者の動態

1. 患者数

新来患者数：昭和40年1月より昭和45年6月までに、当科外来を受診した新来の患者総数は14,621名で、

各年度における患者数は図1に示すようにほぼ平均していた。そのうち昭和44年1月より昭和45年6月までの1年6カ月間についてみると、新来患者数は4,276名であった。

再来患者数再来患者数については、昭和44年度は不明な部分が多くて集計できなかったが、昭和41年より同45年6月までの集計では61,072名で、各年度における頻度は図1に示すごとくほぼ平均していた。また昭和44年1月より昭和45年6月までの1年6カ月の

図1 年度別外来患者数

岩手医科大学歯学部口腔外科（主任：藤岡幸雄教授、大橋靖教授）

Iwate Medical University, School of Dentistry, Department of Oral Surgery

(Chief; Prof. Yukio Fujioka, Prof. Yasushi Ohashi)

受付 昭和46年6月26日

再来患者数は、総計 18,536 名であった。

2. 性年齢別

昭和 45 年 1 月より 6 月にいたる 6 カ月間の新来患者 1,493 名について、性、年齢別頻度を調査したものが図 2 であるが、性別ではそれほど差はなく、わずかに 20 代および 40 代の女性に多くみられた。年齢別では 20 代でピークを示し、20 才から 40 才代までの壮年層において最も多くなっていた。このことは後述するように、当口腔外科の外来診療の対象として、歯性炎症が高い頻度を占めていたためと思われる。

図 2 昭和 45 年性年齢別新患数

3. 月別頻度

昭和 40 年より昭和 45 年月までの、新来患者および再来患者を月別頻度で見たものが、図 3 および 4 である。新来患者については、各月ともに差がほとんど認められないのに比べて、再来患者では 1, 2, 3 月および 8 月の来科数が多く、当地方が農村地帯であることを考慮するならば、これらの月が丁度農閑期に一致している点から

図 3 その 1 月別新患・再来数 (S. 40 年 ~ S. 43 年)

図 4 その 2 月別新患・再来数 (S. 44 年 ~ S. 45 年 6 月)

みて、当口腔外科の実態が良く示されているものと思われる。

また 45 年における再来数の増加は、同年 2 月より開始された歯学部最高学年の臨床実習において、経過の観察を厳重に履修させている結果にもとづくものと考えられる。

4. 診断別頻度

昭和 44 年初めから 45 年 6 月までの 1 年 6 カ月間において、新来患者について主訴に対する診断別の分類を行ない、それに基づいてその頻度を示したものが、表 1 および 2 である。これによると歯牙支持組織疾患とそれから波及したいわゆる歯性炎症の患者が最も多く、3,247 名で全体の約 76% を占めており、非常に注目された。

その他のものとしては、外傷、奇形、埋伏歯を含む萌出異常などが高い頻度を占めていた。ついで、嚢胞は 107 例で 2.5%，良性腫瘍は 54 例で 1.3%，悪性腫瘍は 24 例で 0.6% であった。その他のものとしては、表 3 のような疾患が認められた。なお全体としては、約 0.5% に相当して記載不十分のための分類不能例があった。

表 1
診断別頻度 (その 1)

		例	%
外 傷	軟 組 織	17	(0.3)
	歯 牙	75	(1.8)
	顎・歯槽骨	43	(1.0)
奇 形	唇・顎・口蓋裂	102	(2.4)
	鼻咽喉機能閉鎖不全	32	(0.7)
炎 症	軟 組 織	150	(3.5)
	歯 槽 骨	260	(6.1)
	智歯周囲炎	308	(7.2)
	上 顎 洞	26	(0.6)
	顎 骨	83	(1.9)
	う 歯	1069	(25.0)
歯牙・支持組織疾患	歯 髓 炎	126	(2.9)
	歯 根 膜 炎	825	(19.3)
	歯周疾患 { P	338	(7.9)
	歯周疾患 { P 発作	62	(1.4)
埋 伏 歯・萌出異常		128	(3.0)

表 2
診断別頻度 (その2)

	例	%
出血	8 (0.2)	
拔牙後異常	11 (0.3)	
疼痛	50 (1.2)	
治癒不全	25 (0.6)	
感染症	107 (2.5)	
嚢胞	54 (1.3)	
腫瘍	24 (0.6)	
口腔粘膜疾患	74 (1.7)	
褥瘡性潰瘍	26 (0.6)	
歯肉炎	21 (0.5)	
舌炎	13 (0.3)	
顎関節症	52 (1.2)	
神経疾患	17 (0.4)	
その他	150 (3.5)	
合 計	4,276 (100.0)	

表 3
診断別頻度 (その3)

その他	10
エプーリス	34
小帯異常	7
唾液腺疾患	10
変形	6
外歯瘻	8
血液疾患	6
知覚異常	1
マルファン症候群	1
ブラマー・ヴァンソン症候群	67
その他	150

5. 診断名と月別との関係

1) 外 傷

顎骨々折および歯槽骨々折では、昭和 44 年の 8 月が最も多くてピーク状を示しており、ついで 1 月が多かったが、その他はほぼ平均した受診状態であった。

2) 奇 形

奇形においてもほぼ平均した来院数を示しているが、

図 5

図 6

図 7

図 8

44 年から積極的に開始した鼻咽喉閉鎖不全に対する診断と治療に応じて、他家より診断を依頼されて来院する患者が、7 月以降には増加している傾向がみられる。

3) 炎症

炎症群では全体的にみて、真冬および真夏に多く、他科におけるものと同様な傾向を示している。炎症群のうちとくに智歯周囲炎についてみると、1 月と 8 月が非常に多くなっている。

4) 歯牙支持組織炎

う蝕歯のために拔牙の適応であった症例が最も多く¹⁾、これらは農閑期にほぼ集中していた。このことは、先に述べた当大学の立地条件による特殊性のためと思われる。

図 9

図 10

図 11

図 12

5) 腫瘍

腫瘍については、良性および悪性のものがともにほぼ平均した受診状態を示していた。

図 13

図 14

II. 口腔外科外来患者の地域別受診状態

岩手県における保健所の各ブロックは、図 15 のように 7 つに分けられているが、歯科医師の分布状態は県庁所在地である盛岡市に集中している。これらのブロックからそれぞれ当科を受診した状態は、図 16 のごとくである (なおこれらの集計においては、住所の明確でないものについては除外した)。これについてみると、盛岡市近郊よりの患者が最も多く、盛岡、岩手ブロックのみで 82.4% の多数を占めており、ついで花巻、北上ブロックにおける 3.1% であった。注目されるのは県南地方の一ノ関・大東ブロックで、7 ブロックのうち最も少なかったが、この点は宮城県との位置的關係を無視することが出来ないものと思われる。

また県外からは 112 人 (4.3%) で、比較的多く当科を受診しており、しかも次第に上昇の傾向がみられる。その中で青森県、秋田県からの受診患者が多かったのは、歯学総合診療機関が東北では仙台、盛岡に所在しているためで、単に岩手県地方のみを対象とした施設ではなく、岩手、秋田、青森を含めた北東北地方全体の施設として、将来とも考えていかなければならないものと思われる。

図 15 各地域の上数字は歯科施設数
() 内は歯科医師数 + は勤務医

図 16 保健所ブロック別来科率

図 17 月別来院患者数

図 18 各ブロックより盛岡までの距離数

体的には平均していたのに反し、近郊町村では 1~3 月と他の月ではかなりの相違がみられた。このことは当地方が農村地帯であることから、農閑期に相当する 1~3 月に受診率が高かったものと思われる。なお 9 月にもかなりの上昇がみられたが、これは学校検診後の集団治療がこのときに行なわれたためである。

地域的条件についてみると盛岡市内が圧倒的に多かったが、各保健所ブロックより盛岡までの距離は約 35 km ~193 km (国鉄の距離) で、きわめて遠距離にあり、時間によると 30 分~4 時間を要する。このように大都市とは違って、距離的な問題とともに交通網が粗であるという時間的な制約がある特徴を有している。

考 察

岩手県は本州の北東端部に位し、総面積では全国で北海道を除き最も広く四国 4 県に匹敵し、12 市 12 郡 32 町 19 村より成り立っている、農業を主とする県である²⁾。本県の人口は昭和 44 年の調査で 1,371,079 人であるが、歯科医師数は 295 人で人口 10 万対歯科医師数では、全国で最も少ない状態である³⁾。また本学の所在地である盛岡市は、人口 189,642 人で歯科医師数は 16 人である²⁾。菊池によれば、一般歯科診療の恩恵を受ける

盛岡岩手ブロックについて、月別にこれを見てみると図 17 のように盛岡では 1~3 月がやや多い程度で、全

ことの出来ない無歯科村の住民が県人口のほぼ 1/7 にあたる 20 万 54 人もいるとのことである⁴⁾。

このような立地条件にある当大学における、口腔外科患者の動態についてみると、外来患者数は年間を通じてほぼ平均しており、2,000~3,000 人であったが、これは次第に上昇して行く傾向である。

年令別では最近の 6 カ月間の集計についてみると、20 才代が最も多く次いで 30 才代で、20 才代を中心にしたピラミッド型を呈していた。また性別では女性がやや多く、これらは塩田の報告に類似しているようである⁵⁾。

月別にみると新患数はほぼ一定していたが、1~3 月にやや多い傾向がみられた。また再来患者においては変動がみられ、1~3 月のほか 8 月の夏休みの季節に多かったのが特徴的で、これは当大学が農村地帯に位置し、農閑期などの季節的変動を無視出来ない実情にあることを示している。最近においては全体的に患者数の上昇が目立ち、とくに 7 月に多い傾向がみられた。これは前述したように学生の臨床実習が徹底して行なわれているためと思われる。

最近 1 年 6 カ月間の新患 4,276 名について、疾患別の頻度を見てみると、う歯などの歯牙支持組織疾患が最も多くて 56.5% も占め、さらにこれに炎症を含めると 76% という高率を示した。分類方法は異なるが、塩田も歯牙疾患は主として歯髄炎および歯根膜炎で、これが全体 48% のを占めていたと述べている⁵⁾。西嶋らも、う蝕および歯周疾患が多かったといっている⁶⁾。特に炎症については、歯牙が原因する歯槽骨炎が多く、塩田の 7.2% に対して私達の成績では 8.0% で、やや多い状態がみられた。これらは、当地方における慢性的な歯科医師の不足と衛生観念の不足が、かなりの影響を及ぼしているものと思われる。

年令的には 20 才に多かったが、このことは先に報告した抜歯の臨床統計でも同じ結果が得られている⁷⁾。

奇形については、塩田は新来患者 15 人につき 1 人の割合で来院しており、6.5% を占めていたとのべているが⁵⁾、我教室では 3.1% であった。腫瘍については悪性腫瘍は 0.6%、良性腫瘍は 1.3% であった。朱雀らは 5 年間の良性腫瘍について検討し、外来 8,280 名中 2.73% にあたるとのべている⁸⁾。

このように、口腔外科を訪れる患者の疾患は種々であり、地域差もかなり影響するものと考えられる。さらに鈴木らは、医学部付属病院の歯科診療においても比較的口腔外科手術を要求されることが多い⁹⁾ としており、この点からも専門機関としての歯学部口腔外科の責務は、非常に重大なものであると思われる。

疾患別と月別の関係については、著明な変動が炎症において認められた。歯槽骨炎では 6 月と 11 月に多くみられたのに対し、智歯周囲炎では 1 月と 8 月に多くみ

れ、労働条件との関係や季節的な関係がうかがわれた。

当科を訪れる患者の多くは盛岡市内の在住者であったが、近郊からの来院者も多くみられた。本学矯正科の石川らは、来院に要する時間について 40% が 30 分以内のところから通院し、これには盛岡市内の患者が大部分を占め、残りの 60% のものが片道 30 分以上の時間を費やし、なかでも 36.1% のものが 1 時間以上を要するとしている¹⁰⁾。矯正患者と一概に比較できないが、交通機関の不便さによる影響がとくに強く感じられた。愛知学院大学の報告では、来院圏は約 70% が 30 分以内のところ、バス利用者が多いのが特徴であるとされている¹¹⁾。このように当科への通院患者の通院事情は、都会の口腔外科のそれとは非常に異なり、交通の不便な患者に対しては時間的な束縛を受けるため、特に入院を希望して来科するものもかなりいる現状である。したがって治療および手術などの決定には、この点を充分考慮すべきであると思われる。

結 論

私どもの岩手医科大学歯学部附属病院口腔外科は、創立後 5 年を経過した。これを機会に外来患者の動態について、とくに昭和 44 年 1 月より昭和 45 年 6 月に至るまでの実態を調べ、今後の治療方針の手引きとなるように、種々の検討を行なった。その結果地域的な特徴が十分に考えられ、特に北東北における口腔外科の専門診療機関としての責務の重大さがうかがい知れた。

文 献

- 1) 藤岡幸雄ほか：岩手医科大学歯学部口腔外科における創設後 5 年間の入院患者の臨床的観察。口科誌 20：掲載予定 1971。
- 2) 岩手日報社：岩手年鑑 1971 年版、岩手日報社、盛岡、1971。
- 3) 1971 歯科医師手帳便覧、医歯薬出版、東京、1971。
- 4) 菊池万之助：へき地歯科巡回自動車計画への道。歯界展望 25：849~854 1965。
- 5) 塩田重利：鹿児島大学医学部歯科口腔外科臨床研究会、第 9 回症例報告、1 年間に訪れた新来患者の統計的観察。日本歯科評論 293：88~90 1967。
- 6) 西嶋克己ほか：岡山大学医学部口腔外科教室最近 10 年間に於ける外来患者の臨床統計的観察。日口科誌 15：434 1966。
- 7) 藤岡幸雄ほか：抜歯に関する臨床統計的研究。口科誌 16：452~467 1967。
- 8) 朱雀直道ほか：我教室に於ける良性腫瘍の臨床統計的観察(抄録)。日口科誌 18：201 1969。
- 9) 鈴木真ほか：弘前大学医学部付属病院歯科口腔外科診療実態(抄録)。日口科誌 19：413 1970。
- 10) 石川富士郎ほか：岩手医科大学における矯正臨床のすすめ方。日本矯正歯科学会雑誌 26：63~69 1967。
- 11) 榊原悠紀田郎ほか：本学付属病院に於ける新来患者の動態。愛知学院大学歯学雑誌(抄録) 7：194 1969。